

濃州関ヶ原合戦の展開 ―福束城の戦いと丸毛氏―

The expansion of Sekigahara Battle in Mino Province ― A Focus on The Battle of Fukutsuka Fort and The Trend of Marumo-ke(Marumo family)―

山田昭彦
Akiko YAMADA

要旨

関ヶ原合戦の前哨戦、福束城の戦いについて、家康等の文書から諸合戦に先行し行われたこの戦いの意義や、岡山藩の「奉公書」から福束城主丸毛氏の足跡について考察。

一 濃州関ヶ原合戦

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原合戦直前のおよそ一ヶ月にわたり、八月十六日福束城の戦い、二十二日米野の戦い、竹ヶ鼻城の戦い、二十三日岐阜城の戦い、河渡川の戦い、九月十四日杭瀬川の戦いと美濃平野では断続的に合戦がおこなわれ、最終的には九月十五日の関ヶ原合戦へと繋がる。まさに、濃州関ヶ原合戦が展開したのである。（⑦）頁別図参照

しかし、両軍が美濃平野で決戦に及ぶことは両軍が事前に約していたわけではない。西軍・石田三成は、慶長五年八月五日の段階においても、清須城主福島正則の去就は「御理申し半ば」との見通しを持っていた。羽柴左衛門大夫正則に「縷の望みを賭けていた」というところであろうか、この見通しに従えば、戦端は「三州表」で西軍の先鋒清須城主羽柴（福島）左衛門大夫正則と、東軍の先鋒さしずめ三河吉田城主羽柴三左衛門輝政（妻は家康娘督姫）といった共に羽柴姓を有する両者の間で戦端が開かれるといったところであろうか。

またこれ以外にも近年の資料調査の成果によって次のようなことがわかっている。

- ・東軍の先鋒として福島正則と池田輝政が派遣されたとされていたが、両者の東海道西進には時間差があること。
- ・福島正則の娘は輝政の居城三河吉田城に置かれていたこと。
- ・東軍として東海道を西に向かっていた鳥取城主宮部長熙（五万石）は、西軍に付く

ため三河国池鯉鮒の陣中を抜け出し上方を目指したが、尾張国津島で家臣により身柄を確保され、岡崎城まで連れ戻されたこと。

（以上『愛知県史』資料編13織豊3参照）

こうした記述から、「小山評定」の結果、羽柴を称する諸将が一枚岩となって東海道を西へ上ったとするのは、江戸幕府成立の序章として出来すぎた物語である。

慶長五年八月段階において、家康を始めとするいわゆる東軍の諸将にとっては疑心暗鬼の状態が続いていた。

一方、毛利輝元を大坂城に迎えた西軍は、瀬戸内地域の制圧、伏見城攻略、田辺城・大津城包囲戦、安濃津城攻略、水軍による尾張沿岸部への攻撃と多方面への展開を進めた。岐阜中納言織田秀信は、こうした情勢や豊臣政権とのこれまでの関わりにより西軍に付くこととなったのである。その結果美濃の諸将の大半は西軍に味方したため、東軍に対して大垣城、竹ヶ鼻城、岐阜城、犬山城を結ぶ防衛線（即ち木曾川筋での防衛線）を引くこととなった^①。

二 福束城の戦い

（一）経緯

ここでは、美濃平野合戦の嚆矢となった八月十六日福束城の戦いについて考察する。二十二日の木曾川渡河戦、米野の戦い、竹ヶ鼻城の戦い、二十三日岐阜城の戦いについてはこれまでも、関ヶ原合戦の前哨戦として取り上げられてきた。しかし、福束城の戦いはこれまで等閑視された戦いであった。

理由としては、合戦の規模が小さいこと、二十二日の木曾川渡河戦から始まる一連の戦いとは連続性の点で一線を画すこと、一次資料の残存状況が乏しいといったことがあげられる。この戦いを描写した資料としては『美濃国諸旧記』（寛永末・正保）、『新撰美濃志』（天保十四・尾張藩士岡田文園）、『美濃雑事記』（天保年間）、『美濃明細記』（元文三・伊東実臣）があるが、こうした江戸時代の軍記物・地誌といった編纂物に制約されてきたことも、この戦いの研究を阻んでいた要因といえよう。

これらの資料によれば、福束城とその城主丸毛氏の記述の概要は以下のとおりである。福束城は応永二十一年（二四一四）土岐氏の家臣であった福束藏人十郎益行が築城して南伊勢との水運を取り仕切っていた。正長元年（二四二八）に丸毛光慶が居城とし、以来代々丸毛氏が継承した。その後信長的美濃侵攻に伴い服従し、秀吉の下で福束二万石を所領とした。慶長五年、関ヶ原合戦に際して福束城主丸毛兼利は東軍の福島正則らの誘いを断り、石田三成らのいわゆる西軍に加わった。八月十六日、大藪村、大樽村に

援軍の大垣城主伊藤彦兵衛尉（盛正）、長松城主武光忠棟らとともに陣を敷いて、東軍今尾城主市橋長勝、松ノ木城主徳永寿昌の軍と大樽川を挟んで対峙したが、夜になって市橋軍の一部が楡保、十連坊へ忍び込み村人を味方につけ、放火したため援軍が退却、丸毛軍も耐えきれず福束城を捨て大垣城に落ちていった（Ⅱ「引入り逃つばみける」）。この戦いの後、福束城には市橋長勝が入り、関ヶ原合戦後に城は破却された。また、城主であった丸毛兼利はその後、加賀にて客死したとされる。

（二）福束城の戦いの意義

それではここで、福束城の戦いの前後におけるいわゆる東西両軍の動きを確認するにとしよう。

慶長五年

七月二五日、家康、諸將を集め軍議（いわゆる「小山評定」）を開く。

八月 一日、伏見城落城

五日、毛利秀元、吉川広家ら安国寺恵瓊、長束正家らと伊勢に展開

家康江戸に戻る。

一六日、福束城の戦い（一翌一七日陥落）

一九日、村越直吉、尾張清須城到着

徳永寿昌、市橋長勝ら高須城攻略

二二日、米野の戦い、竹ヶ鼻城の戦い

二三日、岐阜城合戦

こうしてみると、福束城の戦いは東軍にとって、八月十九日江戸から清須に派遣された村越直吉を迎えて開かれた、福島正則、池田輝政らの東軍先遣隊による軍議（いわゆる清須評定）に先立って行われたことがわかる。羽柴を称する諸將を中心とした東軍先遣隊にとって、この戦いは濃尾の国境周辺で行われたものとしては嚆矢を飾る戦いであった。

この戦いを資料からみると、七月三十日付の真田昌幸宛石田三成書状（真田宝物館所蔵文書）の中では、

一 今度上方より東へ出陣之衆、上方之様子被

承悉帰陣候、然者於尾・濃令人留、帰陣之

衆一人く之所存、永々之儀秀頼様へ無粗

略究仕、帰国候様二相ト止候事、

とあり、七月末の段階で、石田三成の作戦として、「尾・濃人留」により上杉攻めを中止し上方に向け帰還する諸將に対し、豊臣秀頼へ「無疎略究仕」ようにとの計略があったことがわかる。

また一柳直盛に関わる話として次の資料があげられる。

（資料1）一柳中興御系図御手柄物語寛

一、三州吉田にて諸大名衆御人質被召上、則池田

三左衛門殿御請取被成候、監物様より一柳

四郎右衛門を御人質に御出被成候、是に御附

置被成候侍ハ長谷川寛右衛門・宮嶋織部兩人

四郎右衛門二御附置被成候、不及申上諸大名

衆不殘御人質御上ケ被成候、監物様者黒田江

八月九日二御帰城ニ而御座候、黒田二御逗留

之内、御城御普請等被仰付候、其内二小川土

佐守内稲葉清六と申者、石田治部少廻り文を

持、木曾川三津屋之渡り船留と申処を忍越黒

田江参、一柳三郎左衛門、同名九郎兵衛右両

人を頼、治部少口上之趣を申上候、今度一味

同心可被成候、於御同心にハ本国之儀二候間

美濃一國、金銀何程成共御望次第に渡し可申

と申上候得者、監物様御返答ハ、家康公江堅

く御味方之御請け申上候得ハ、金銀知行何程

治部少渡申同心申間敷候と御意被成候時、亦

清六右之兩人を以申上候ハ、御合点不参候ハ

御袋しやうりん様、御上様御子孫達三人共に

人質に取、則敵地濃州三津屋之渡堤の上に

さらし可申に相究申二付、土佐守・左馬助

父子共二右之段迷惑千万御笑止ニ存被申儀

に御座候間、可然御返事被成被下候様ニと

達而監物様江清六申上候得者殊之外御気色

違、監物様御意被成候者母妻子共に三津屋

之堤にて火あふりニ治部少仕候ハ見物二可

罷出候条、其旨治部少并土佐守父子二可申
聞候、重而清六参候者首を刎可申候、右之
廻り文ハ御請取之被成、則時に井伊侍従殿
迄御上ケ被成候事

この資料は、合戦当時黒田城城主であった一柳直盛の子孫が江戸時代にまとめたものである。^②それによれば上杉征伐に同行していた一柳直盛は、八月九日黒田城へ帰城した。そこへ一柳家の旧臣で小川土佐守（祐忠・妻は一柳直高女）の家来となっていた稲葉静六が、石田三成の書状を携え密かに木曾川を渡り訪れ、同心すれば美濃一國並びに金銀御望次第といった誘いをかけた。しかし誘いを直盛が断ったところ、人質の直盛の母（勝林院）と妻子を三津屋之渡堤の上で処刑すると強圧的な姿勢をとったため、直盛によって追い返されることとなった。一柳氏が東軍として旗幟を鮮明にしたことは、江戸時代一柳氏の「御手柄」を示す上で当然の記述であるが、ここでも両軍は木曾川を挟み対峙していることが確認できる。

また、関ヶ原合戦直前の九月十二日、石田三成が大和郡山城主増田長盛に対して出した書状の一節で次のようなことを記している。

（資料2）

一 兎角如此延々と候ハヽ、味方中也心中難計
御分別之前二候事、敵味方下々の取沙汰二
ハ、妻子人質の儀ハ何様ニても苦かるまし

（増田右衛門尉長盛）（徳川家康）

き躰二候、増右、内府へ被仰合筋目二候と
ても、妻子など一人も成敗之儀ハ有ましき
と申なし候、是も黒白を存たる者ハ無余儀
候、既ニ如此打被討候へ共、其者之妻子御

（穩）

成敗隠便故、先書にも如申犬山加勢衆謀叛
なとも出来候故、さりとてハ有間敷儀なが
ら是も妻子氣遣無之故と下々申候、爰元諸
侍申され候も敵方之妻子五三人も成敗候ハ
ハ心中替可申と申事二候、爰許承候通申入候、

御分別二不過候事

（石田三成書状写 古今消息集（部分））

ここでは、大山城の開城は人質の処刑が無かったためとの風説を伝えると共に、敵方の諸将の人質を十五人も処刑すれば、東軍諸将の気持ちもかわると、強い姿勢を求めている。この書きぶりは、小川家臣稲葉清六が、旧主家である一柳氏に言い放った言葉と重なる内容であり、西軍諸将が共有していた認識といえよう。

このように、西軍が仕掛ける形で高まった木曾川を挟んだ緊張関係について、東軍はどう考えたのであろうか、それを考える上で家康が、福島正則・徳永寿昌に出した次の二通の文書をあげておきたい。

（資料3）徳川家康書状 善導寺文書

三日之御状今日申刻於江戸令披見候、聊油断無之
候間、可御心安候、羽三左・藤佐・井伊兵部少輔
進之候間、御談合候而一刻も其道筋御明候事專一
候、猶替儀候者可被仰越候、恐々謹言、

八月五日 家康（花押）

清須侍従殿

徳永法印

（資料4）徳川家康書状 源喜堂古文書目録七

一 両人方へ之書状披見申候事
一 大津之事令得其意候事

猶々一刻も其元道御明候様專一候、此方之儀者少も

無油断出馬可申候間可御心安候、恐々謹言、

八月十日 家康（花押）

清須侍従殿

徳永法印

この二通の書状はともに、清須城主福島正則と美濃松ノ木城主徳永寿昌（法印）に宛てられたものであるが、共通する内容としては一刻も早く「道を明けること」を求めている。これら一柳氏の所伝や家康の書状は美濃、近江を経て上方に向かういわゆる東山

道に相当する大動脈とその周辺は、西軍によって封鎖されていたことを示すものである。それでは、伊勢路はどうであろうか。

(資料5) 徳川家康書状 徳川記念財団所蔵文書

急度申候、仍山岡道阿弥備前衆差添、あの、津

へ遣候之間、其許船丈夫被申付可被渡海候、委

細道阿弥可申候、恐々謹言、

八月朔日 家康(花押)

田中兵部太輔殿

このように、八月初めには、家康は船を利用した伊勢との海上交通の確保を岡崎城主田中吉政に求めていた。しかし、五日には毛利秀元、吉川広家、安国寺恵瓊、長束正家らが伊勢に展開し上方への交通、連絡はよりいっそう困難な状況となった。

こうした上方との遮断は、下野に在陣する徳川秀忠にとっても同様の状況であった。

秀忠は八月十三日、尾張国に在陣する浅野幸長、一柳直盛に対してそれぞれ「然者上方の様子如何、承度存候」と上方の様子を尋ねている(徳川秀忠書状写『武家事紀』巻三十二・『古文書集』)。中山道を西上する予定の徳川秀忠も同様に西軍によって東西の分断が進む中、上方の状況は把握できない苦境にあった。

こうした状況下で行われた福東城合戦は、西軍が構築した木曾三川を要害とする防御態勢や東西を分断した情報統制に対して、風穴を開ける上で大きな役割を果たした。このようにしてみると、木曾川渡河戦に先行して突出する形で行われたこの戦いを理解することが出来る^③。

三 福東城主丸毛氏

それでは、次に福東城主丸毛氏についてみることにしよう。

『美濃国諸旧記』によれば、正長元年(一四二八)より丸毛光慶が福東城主となり、その後、光益―光長と続いた。光長は文明二年(一四七〇)同郡脇田へ移るもその子光兼は再び福東へ戻った。光兼は、斎藤龍興に属したが、信長の美濃侵攻と共にその旗下に入り、今尾城を賜った。本能寺の変後、羽柴秀吉の配下となり天正十一年(一五八三)福東城へ戻り、文禄二年(一五九三)死去。その子兼利は、秀吉に仕え、慶長五年を迎えた。石田方に味方し福東城に立て籠もる兼利に対して、東軍福島正則は、兼利と長年の知り合いである尾張赤目・横井伊織を派遣して随順を勧めたが応じなかったため、八

月十六日福東城の戦いが始まり、翌十七日には落城した。

また、『新撰美濃志』の「安八郡福東村」にある『古城』の記述によれば、

丸茂三郎兵衛安職或いは兼頼とあり慶長のはじめ居住す。

『安職』は小笠原長清の裔孫丸茂兵庫頭が子にて多芸郡

大墳よりこ、にうつりて二萬石を領す。石田三成に与し

て慶長五年没落し、其のち前田利常に属して二千石を知

行し、正保四年正月二十八日死去す。法名を友松院合水

道居士といひ、其墓位牌等大墳村莊福寺にあり。道和

の弟五郎兵衛は御旗本となりて代々江戸に奉仕す。

とあり、その後、福東合戦の記述へと繋がる。

この記述によれば、丸毛氏は小笠原長清の子孫であり、福東にて二万石を領していたとされる。莊福寺(現養老町高田)には、丸毛氏歴代の墓所がある他、小笠原長清の「漆骨蔵器」(県重要文化財・岐阜県博物館寄託)が伝えられており、小笠原氏と丸毛氏の繋がりについて確認することができる。

しかし、これまでみた福東城に関する歴史は、古文書による考察を除けば、江戸時代の軍記や地誌に拠るところが多く、その記述については事実として確定できない脆弱な状況であった。

四 岡山藩「家中諸士家譜五音寄」にみられる丸毛氏

このように関ヶ原合戦で敗者となった丸毛氏は、その係累が旗本として存するも資料的には歴史の表舞台から消えてしまい、その考察を困難なものとした。しかし、岡山藩「家中諸士家譜五音寄」は福東城主丸毛氏に直接関わる記述があり、その動静を確認することができる。

この資料は、いわゆる「奉公書」^④とよばれ、各藩士がその履歴及び先祖の勤功を書き上げるよう藩から命ぜられ作成したもので、以後廃藩までほぼ五十年ごとに提出が命ぜられ、書き継がれたものである。軽輩以上の全家臣を対象としており、総冊数は三千冊を超える。こうした書上の中で最も早く本格的に作成されたのが寛文九年(一六六九)に作成された「家中諸士家譜五音寄」等の二十一冊である。幸いなことにその内二十冊は現存しその中に丸毛氏に関わる記述がみられる。

(資料6)

若原監物組頭

丸毛次右衛門 高四百石 寛文九西五十三歳

一私義寛永拾三年ニ被 召出、同十四年ニ御知行三百石致拝領候、同拾九年ニ同名道和養子ニ仕度旨申越、其段、御耳ニ相達、御暇被下、加州江罷越申候

一養父丸毛道和親三郎兵衛、先祖小笠原之家より別、代々之系図所持仕候

一丸毛数代美濃国多芸之庄ニ居住仕候、道和祖父丸毛兵庫助・同三郎兵衛、斎藤治部大夫殿ニ随罷有候、安藤伊賀氏家常陸別心之時分、丸毛居城大塚へ氏家大軍ニ而取懸申刻、兵庫・三郎兵衛父子雜兵三百斗之人数ニ而、在所お廿四五町取出もろ原河原ニ而及一戦候処ニ、氏家丸毛無勢ヲ謾（慢）平押ニ懸、丸毛先手追立申候へ共、二之手ニ而切崩、氏家先手原二助・小谷かいつか・稲葉右近など申者打取、其外悉追散、勝利ヲ得申ニ付、治部大夫殿理運ニ成申候、以後、感状ニ相添、同国之内ニ而為加増知行所八村給候由伝承申候、其後信長様へ兵庫・三郎兵衛父子共ニ御奉公仕候、兵庫・三郎兵衛度ニ心操在之由ニ御座候へ共、委承届不申候

一太閤様御代ニ成、三郎兵衛義被召出、同国之内ふくつかと申所ニ而、知行七千石之御朱印被下罷有候、関ヶ原一乱之刻、三郎兵衛・道和父子共ニ石田治部少味方仕、居城致自焼、大垣へつほミ申候、浮田中納言殿・毛利宰相殿伊勢津之城へ御向候ヲ、関ヶ原表へ引入見可申と申、夜ニ入忍罷越候処ニ、敵相支申候へ共、打破罷通り、両大将衆関ヶ原表へ引込申候由承申候、合戦破れ上方勢没落以後、三郎兵衛父子共ニ、権現様御にくミ強御座候ニ付、影ヲ隠シ居申候、御当家ニ罷有候若原勘解由義者、

（頼）（播）

三郎兵衛智ニ而御座候ニ付、父子共ニ勘解由ヲ便り幡磨へ参、三左衛門様御威光ヲ以弥忍罷有候、大坂御陣已後、板倉伊賀守殿御取成ヲ以、世間広御赦免被成候、三

郎兵衛義ハ追付病死仕候、道和義松平肥前守殿へ（牢）人分

ニ而被召置、知行式千石給候、右之仕合故、一代法体ニ而居申候、道和相果申以後、私ニ跡目知行千石被申付候、過分ニ減り外聞如何と奉存候得共、加賀之家中養子跡目多分減申候、其砌養子跡目まるニ立不申候者式三人も御座候ニ付、其分ニ仕罷有候、不慮之仕合ニ而致牢人、御当地江罷越候処、明暦四年ニ被 召出、御蔵米貳百俵被下、寛文二年ニ御知行四百石拝領仕候、寛文五年 伊予守様被成御在国候付、年頭之為御使越年ニ江戸江罷越、同六年正月末ニ罷帰申候、以上

（牢）

この資料は、寛文九年（一六六九）丸毛次右衛門が岡山藩に提出した奉公書である。この中で、丸毛次右衛門の養父（道和）・祖父（三郎兵衛）は、慶長五年石田方に付き、居城福東城を「自焼」し、大垣城に撤退。その後、伊勢に展開していた宇喜多秀家・毛利秀元の軍勢を「関ヶ原表へ引入」れるよう活躍するも、関ヶ原の本戦そのものが西軍の敗北で終結したため「影ヲ隠シ」隠棲した。その後、姻戚関係（池田家中、若原勘解由は丸毛三郎兵衛の女婿）を頼り池田輝政の家中に秘かに加えられた。大坂の役以降、板倉伊賀守の取り成しにより赦免された。その後、三郎兵衛は病死、養父道和は前田利常の元で二千石にて召抱えられたが、前歴を憚り一代法体であった。次右衛門は、池田家中（三百石）であったが、道和の養子となるため岡山藩を辞し、道和死後その跡を千石で継いだ。しかしその後事情があり、再び二百俵（のち四百石）で岡山藩池田家に再仕官が許された。

この資料の中では、丸毛道和の養子にあたる次右衛門が藩に提出したものであり、関ヶ原合戦当時の生々しい状況を記している。また、「三郎兵衛父子共ニ 権現様御にくミ強御座候」と江戸時代の奉公書とは思えない強烈な書き振りのあるが、これは藩祖池田恒興が長久手の合戦において家康と敵対し敗死したという、他の大名家には見られない池田氏の歴史の特異性によるものであろうか、改めて新たに明らかになったことを列挙すると

- ・豊臣政権下において、丸毛氏は福東の地で七千石を知行した。
- ・関ヶ原合戦当時福東城を守ったのは、三郎兵衛とその子（のちの道和）であった。
- ・丸毛氏は福東落城後も大垣城に拠り、伊勢で展開する西軍が美濃に向かうための支援を行っていた。

・丸毛氏没落以降、池田輝政、前田利常といった諸大名はその仕官を許した。

・大坂の役終結後、丸毛氏のように西軍についた諸將の赦免が図られた。そこでは、京都所司代板倉勝重の活動がみられる。といったことが挙げられる。

五 結語

本稿では、関ヶ原合戦の前哨戦である福東城合戦について諸將の発給文書や奉公書により考察した。そこで明らかになったこととして、

一、福東城の戦いは、西軍が構築した木曾三川を要害とする防御態勢や東西を分断した情報統制に対して、風穴を開ける上で大きな役割を果たした。

二、丸毛氏は、豊臣政権下で旧来いわれていた二万石ではなく、七千石を領していた。また、戦後は、池田氏に置かれた後、京都所司代板倉勝重の取成しにより赦免、その後金沢藩で「法体」のまま禄（二千石）を得た。

今回紹介した丸毛次右衛門の奉公書の場合、次右衛門は福東城主であった丸毛氏の養子として、養父道和に直接接した上で記していること、本来ならば記録せざるべき負の情報を取えて記録していることから信頼性は高いと判断した。

岡山藩「家中諸士家譜五音寄」にはこの他にも美濃を含んだ興味深い記述がみられる。これは、池田家がもともと美濃国池田郡池田荘を本拠とする土豪であったこと、池田輝政が、池尻城主、大垣城主、岐阜城主と美濃の地と深い関わりをもっていたこととの関連性を指摘したい。関ヶ原合戦において全国の諸大名の勢力図が大きく変わることは言を待たない。丸毛氏のように西軍として福東城を守り除封されたもの、同じく美濃の領主として東軍の福東城を攻めに加わり戦後加増された、市橋長勝、徳永寿昌といったようにこの戦いは、各大名・小名にとつて大きな分岐点であった。ここでは、戦いの敗者が勝者の中に、家臣または客分として包含されていくことにも注目したい。勝者となつて加増される大名の場合、家臣団の拡大が必要であり、その点、様々な意味で素性の知れたいわば負け組を取り込むことは有益な手法であったとも考えられる。慶長・元和年間には、武士とりわけ豊臣氏に忠義を尽くした武士をめぐるリクルート（再仕官）活動が盛んに行われた時代であったといえよう。

今回取り上げた、岡山藩「家中諸士家譜五音寄」をはじめとする奉公書は、十六世紀末から十七世紀初頭の武士の様々な動静を確認する上でも重要な資料であり、今後も引き続き考察を深めることとしたい。

（補注）

- （1）図録『関ヶ原』（岐阜県博物館 二〇一七）
- （2）柴田一は編者について、一柳直長（二六七八〜一七五九・旗本五千石・播磨高木陣屋）の可能性をあげている。（小野市好古館『播州小野藩一柳家資料 由緒書』一九九九）
- （3）福東城攻撃が先行した理由としては、その他に西軍の拠点大垣城への河川補給路を断つ目的が考えられる。
- （4）奉公書の分析としては、佐藤孝之「加賀藩家臣団の形成過程と家臣の由緒―先祖由緒井一類附帳」を素材として『近世初期の大名と情報』東京大史料編纂所研究成果報告二〇一五―二・二〇一六がある。
- （5）倉地克直編『岡山藩 家中諸士家譜五音寄』（岡山大学文学部 一九九三）
- （6）金沢藩が丸毛道和に対して与えた二千石は、養子丸毛次右衛門に対して半知の形で伝えられた。金沢藩奉公書に福東城主丸毛氏の姿がみられないのは、次右衛門が同藩を離れたことによるものである。

濃州関ヶ原合戦（慶長5年8月～9月）

